

漢字学習で小学生の学力がみるみるアップ

一章でも述べましたが、国語教育の現場で行われている「ひらがな先習」「漢字の読み書き同時学習」「交ぜ書き表記」などにより、漢字嫌いの子供が増えています。こうした不合理を憂慮し、私の提唱する「石井式漢字教育法」に関心を示し、賛同してくれる教育者も増えつつあります。

次に紹介する土屋秀宇氏は、小学校の校長であるとともに、「日本漢字教育振興協会」事務局長でもあります。果敢に小学校の教育現場に「漢字読み先習」を導入し、すばらしい成果をあげておられます。その小学校は、平成六年には「第43回読売教育賞」の国語部門で優秀賞を受賞しています。

漢字ざらいの子供たちに自発的な学習態度が芽生える

船橋市立行田西小学校校長 土屋秀宇氏

私は学生時代に、大脳生理学の第一人者である時実利彦先生の書かれた本を読んだのをきっかけに、脳の働きと教育の関係について考えるようになりました。大脳生理学からいうと、人間は三歳ぐらいまでがもっとも記憶力に優れ、六歳ぐらいまでは、丸暗記や“直感把握”を得意とする右脳の優位がづくことがわかっています。

その後もこの状態はつづきますが、その一方で論理的な思考を得意とする左脳の働きも徐々に高まってきます。そして九歳ぐらいからは、左脳が優位に働くようになります。

こうした脳の働きに基づいて、教える時期と内容と方法を考えることが、教育効果をあげる最善の方法といえるわけです。特に言葉の力を身に付けるうえで大切な漢字教育を考えますと、漢字を与えるのは、幼児期から八歳ぐらいまでの時期(小学低学年)が最適ということになります。

言葉を司るのは左脳といわれますが、漢字は例外で、左脳だけでなく右脳にも入っていき、「絵で見る言葉」というような感覚で受け入れることができるのです。実際、右脳が強く働いている時期の子供に

漢字を与えると、本当によく覚えてくれます。〇歳や一歳の子供でさえ、漢字を教えると、簡単に覚えてしまうほどです。

「石井式漢字教育」はまさしく、この右脳の優位な時期をとらえた漢字教育法で、つねづね、深い共感をもっていました。というのも、私は学生時代から、国語国字問題に関心があり、「国語問題協議會」の会員でもあって、漢字にはとても大きな関心を寄せていたのです。

ところで、私は平成二年、それまでの長きにわたる中学校の英語教師から小学校校長(船橋市立法典東小学校)に就任しました。そしてそれを機に、石井式漢字教育を実践したいと思いました。国語教育にかかわるチャンスが巡ってきて、大いに張り切っていました。

まずは、現場の先生方の理解と同意を得ることから始めなければなりません。先に述べたような大脳生理学からの説得はもちろん、小学校低学年ぐちいまでの子供のいる先生には、家庭で試してもらい、「子供にとって、漢字を覚えるのはやさしい」ことを実感してもらうようにしました。そのかいあって、赴任して三年目の平成四年度から、全校をあげて、漢字教育に力を入れて取り組むことになったのです。

この平成四年度はちょうど、十年ごとに見直される、文部省の学習指導要領が改められる年度に当たり、漢字教育に拍車がかかること

にもなりました。

というのは、国語科における漢字の扱い方に改訂があり、従来は学年ごとに配当漢字のみを指導することになっていたのが、このときからは、該当の学年より上の学年に配当された漢字および配当外の漢字についても、ふりがなをつければ必要に応じて提示できるようになったのです。

これは、現場教師に対し、漢字教育の弾力的運用と創意工夫が求められていることにほかならず、その意味でも、タイミングのよいスタートとなりました。

具体的な試みとしては、読み先習、解字指導、名文の朗読・朗唱を三本柱としました。その一つひとつについて、もう少し詳しく紹介してみましよう。

読み先習の試みについて

漢字が読めるようになることを目的に、教室などの掲示にはできるだけ漢字をたくさん使うようにしたり、国語の教科書のひらがな表記の上に漢字を貼りつけたり、また他教科でも漢字で示したほうが効果的と思われる語は漢字で教えたりと工夫しました。

また、入学当初から、生徒の氏名は漢字を使用しました。生徒の氏名を漢字カードにし、それを見せながら名前を呼ぶようにしたのです。すると、一年生が二日間で、40人中30人、自分の名前の漢字表記がわかり、呼ばれる前に手を挙げました。三日目では37人が、四日目には全員がわかるようになったのです。しかも、自分以外の生徒の名前もいつの間にか覚えて、その漢字カードを読めるようになっていたのです。

また、学校名をはじめ、日課表、曜日、掃除や給食の当番表、校歌など、漢字で書くことが常識とされている語は、最初から漢字で掲示しました。毎日くり返して使う言葉だけに、まったく抵抗がありませんでした。

「窓」「机」「時計」「壁」「黒板」などの漢字は紙に書いて、それぞれの対象物の横に貼りましたが、ときどき、「これ、何て読むの？」と刺激を与えると、そうしなかった場合と比べて、定着率に差がつくことが明らかになりました。

国語教科書のひらがな表示に漢字を貼るのは、漢字にしたほうが理解しやすいもの、交ぜ書きにされているもの、生活に密着しているもの、登場する頻度の多いものなどを対象としました。

低学年では、「しょう火」を「消火」と直し、「火を消す」という意味だと説明すると、「消防車が水で火を消すんだよね」といった発言が出たり、貼った漢字が他教科の学習に出てくると、「あのとき、あそこに出ていたよ」とよく覚えていて喜んだり、教師がひらがなで書くと、「漢字で直せるよ」と反応したり、ともかく、単に教えられるだけの受け身ではなく、自ら学ぶ姿勢を示すようになるのが嬉しい驚きでした。

また、高学年でもアンケートを取ると、全校の82%が“貼り漢字”を好きと返答しました。そして、漢字を貼るという作業が終了したときには、すでに自然にすらすら音読ができるようになっていくという効果があったのです。

他教科でも、漢字で示したほうが理解を助け、効果的と思われる語が少なくないのです。たとえば、算数です。「」の形は、「さんかけい」と教えても、形と言葉が結びつきにくいのですが、「三角形」と漢字で表すと、「三つの角がある形」であるとすぐに理解できます。音楽でも、「」「」とひらがなで教えるよりも、全音符を二つに分けたものが「二分音符」、四つに分けたものが「四分音符」と音符を図示しながら示すと容易に理解できます。

このように、あらゆる教科において、ひらがな中心のときと比べて、

漢字で教えることにより、生徒の理解と意欲が格段に違うことが実感できました。

解字指導の試みについて

漢字の多くは、“部首”という部品を組み合わせることでできてきたものです。したがって、部首のもつ意味や性格をしっかりとつかみ、それを土台にして体系的に学習していくならば、理解が容易になるとともに、しっかりと記憶に刻まれる効果が期待できます。

部首の意味や性格に着目し、象形・指事・会意・形声といった、その成り立ちから漢字をとらえる解字学習に対して、全校生徒の95%が好きと意思表示しました。その理由としては、知る喜びや感動があること、意味がよくわかること、系統的な学習ができること、新しい漢字も推理できることなどが考えられます。

実際、低学年であっても、「煙」「燃」「焼」「炭」などにはどれにも「火」があること、また「涙」「海」「波」「泣く」などには“氵(水)”があることを取りあげて、漢字には意味があることを教えると、生徒からは「面白い！」の大合唱が起こります。

そうこうするうち、新しい漢字を教えようとするとうちは、「先生、教

えないで」の声があがり、自分で考えることを楽しむようになります。つまり、想像力や類推力の育成に大きな効果をもたらしていると考えられます。

さらに、一年生であっても、“漢字の成り立ちがわかる辞典”を進んで調べるようになり、わかる喜びが新たな学習意欲を引き出すことにつながっていくことを知ったのも、すばらしい発見でした。

名文の朗読・朗唱の試みについて

漢字に親しむ方法として、表現力、作文力、語彙の宝庫である古典を読むようにしました。漢詩や和歌、俳句、定型詩、漢字の絵本(低学年)、国語読本(高学年)など、学年で何をやるかを相談し、「帰りの会」などの時間を使って、毎日短時間実践したのです。

子供たちはこの時間が大好きで、教師が、「今日は時間がないから、中止しよう」と言おうものなら、「ダメ！」とブーイングが起こるといありさまでした。子供たちはなかでも文語文を好みましたが、これは、文語特有のリズムと音の響き、そして緊張感が心地よいからに違いありません。

一年生のあるクラスで、教師が一枚の模造紙に漢詩一編を句読点

や訓点をつけず白文で書いて、最初に文字を指差しながら模範読みを行い、次に生徒たちが声を出して唱えるというふうにして、漢詩の朗唱を行いました。すると、一回目の放課後に早くも、「覚えたから聞いてほしい」と決まってやって来る子が三人いました。実際、この子供たちは正確に覚えていました。

そこでたいへん興味深かったのは、三人のうち二人は全教科五段階評定で「5」を取る優秀な子でしたが、もう一人は主要四教科は「1」を取る子でした。その生徒が、漢詩をすぐに覚えてしまうものですから、教師も驚いていました。漢字(=絵で見る文字)とリズムと音の響きに、その答えがあるのでしょう。つまり、この年齢の子は右脳の働きのはうが優位ですから、右脳が得意とする絵や音楽から成る漢詩の朗唱は楽しくマスターできるのだと考えられます。

ところで、成績が下位ということはどちらかということ、論理や分析を担当する左脳の働きが弱いということです。

ここで注目すべきは、漢詩の朗唱で自信をつけることで、学習意欲が高まり、学習することで左脳の働きも強化されるようになり、学力のアップに効果が見られるようになることです。

また、これも一年生のクラスで、杜甫の「絶句」を取りあげ、このとき

は、映像化の度合いと理解度を見たいと思い、詩の意味はあえて教えず、意味のわかるところだけ話させてみたことがあります。

絶句 杜甫

江碧鳥道白 山青花欲然

今春看又過 何日是帰年

こうみどりにしてとりいよいよしろく

やまあおくしてはなもえんとほっす

こんしゅんみすみすまたすぐ

いずれのひかこれきねん

(川に白鳥が浮かんでいるが、水が碧色^{あお}なので白鳥が一層白く見える。山には赤い花が咲いているが、山が緑色なので赤い花が燃えんばかりに赤く見える。このように美しい景色も春とともに過ぎようとしているが、この春には故郷に帰ろうと思っていたのである。この分ではいつ帰れることやら)

児童A 山が青くて、花がまるで燃えているようだ

児童B 山が青くて、鳥がとても白くてきれいだ

児童C 「何日」は、いつかまたって意味かなあ

児童D 花の色は紅いと思うよ。だって、「燃える」って書いてあるもの

児童E わかった。山が緑色で、その中に紅い花が咲いているのが、まるで火が燃えているようなんだ

児童F じゃあ、鳥もそうだね。緑と白できれいだね、先生

「江」を「山」と勘違いしているので、「じ(さんずい)」に目を向けさせ、そのあとで詩全体の意味を教えると、「当たった！当たった！」と大騒ぎでした。それにつけても、まだ七歳の子供でも、こんな思考ができることに感動させられたものです。

なお、一年生全員に県の標準学力検査を受けさせてみたところ、左記のように、標準よりはるかに高い得点が出ました。しかも、国語のみならず算数にまで注目すべき結果が出ました。こうして漢字教育により、確かに学力もついていたことがわかります。

千葉県標準学力検査の結果より

学年	平均点	県平均点
国語	79	64
算数	83	73

以下、漢字教育の成果をまとめてみます。

漢字に対する理解の的確さと定着の度合いが著しい(聴覚と視覚の一体化の効果)

論理的思考力、直感力、想像力、類推力、分析力、構成力などの伸びが著しい

言葉への興味・関心が強まる

知的好奇心が満たされ、学習意欲が向上

読書量が増加

学力が向上

この船橋市立法典束小学校での漢字学習への取り組みは、私の転任後もつづけられ、平成6年には、第43回読売教育賞の国語部門で優秀賞を受賞しています。

ところで、私は、自閉症の子供や知的障害児の教育に漢字を取り

入れて、そこでも、大きな成果をあげた経験をもっています。こうした障害をもつ子供たちの多くは、左脳の働きが弱っているために言葉の遅れをもっています。その点、漢字は左脳のみならず、右脳にも入っていくため、彼らにも受け入れやすいといえます。それどころか、左脳が弱っている分を補おうとして右脳が一生懸命働くためか、漢字を教えると、普通学級の子供と同じように覚えてくれるのです。私は、そのことを、S君という自閉症の子供を通して、はっきりと教えられました。

S君は授業中、教室の机にじっと座っていることができず、廊下に出ては、ぐるぐると左回りをつづけているといった子供でした。そんなS君を校長の私が引き取って指導することにしました。

S君には一つだけ、関心をもっているものがありました。それは、乗り物でした。それで、私はいつも画用紙を用意して、絵を描かせました。すると決まって、電車を二つ描きます。一つは黄色の電車で、あるとき、「これ、総武雄で、東京に行くんでしょ」と聞くとうなづくので、電車のそばに「東京」と漢字で書いてあげました。もう一つは新幹線で、そこには「新幹線」と漢字で書いてあげました。そのとき、S君が本当に嬉しそうにニコツと笑ったのが、昨日のこのように思い出されま

す。

翌日また、画用紙を渡すと、同じように電車を描くものの、黄色の電車には「東京」らしい文字が、もう一つには「新幹線」らしい文字が添えてあるではないですか。これを生かさない手はないとひらめきました。

夏休み前に、S君のお母さんを校長室に呼んで、「漢字を書いたカードを作って、夏休みの間、一日五分間でいいので、真ちゃんとお母さんとお父さんで言葉の遊びをしてください」とアドバイスしました。40日あれば、40の言葉が増える勘定になります。

二学期が始まると、S君は束ねたカードを持って、校長室にやってきました。カードを数えると実に、二百枚近くありました。お母さんが言うには、始めは一日一枚のつもりが、あまりに反応がいいので、どんどんやっていくうちにここまで数が増えたというのです。これは凄いいいよ」と。これが初めて、S君の口から出る言葉を聞いたときでした。そして、二百枚近いカードをすべて、読むことができたのです。

それからは、驚きの連続でした。「S君が皆といっしょに体育の時間に駆け足をやった」「S君が授業中に教室に入れた」「S君が教室に入

って、椅子に座った」「S君が授業中ずっと、椅子に座れるようになった」、ついには「S君が教科書を開いた」というようにどんどん変わっていったのです。

あるとき、担任から、S君の連絡帳を見せられました。家で、S君がお父さんとお風呂に入っていたとき、「学校で勉強、頑張るからね」と言ったというのです。父親は思わずS君を抱き締めて、「頑張れよ」と励ましたそうです。そして、その夜は夫婦で手を取り合って、「よかったね」と喜んだと書かれていました。

S君はこの春、高等学校を卒業して、ときどき、手紙をくれます。先天的な脳の傷は残ったままですから、自閉症自体が治癒したわけではないのですが、それを補うにあまりあるくらいの語彙が増えたことで、S君の生活が変わったといえます。これはひとえに、漢字の力、言葉の力だと、私は思っています。

「漢字」は樹でたとえれば、根に該当し、「根を養えば樹は自らよく育つ」の道理で、漢字の力を強めることにより、幹である国語力は増大し、知・情・意という枝葉を繁らせることもできるというものです。

漢字に強くなれば、文字に対する興味や関心を高め、語彙を増やすことになるので、総合的な国語力はもとより、理解力や思考力、表

現力などを向上させます。また、活字に対する抵抗も少なくなり、読書にも意欲的に取り組むようになります。

その結果、昨今の子供たちの問題点になっている「国語嫌い」「表現力の低下」「読書離れ」などの根本的な解決にもつながるのです。さらに他人の力を借りて飛ぶグライダー飛行機ではなく、自らの力で飛び立つジェットエンジン飛行機のような、前向きで意欲的で自律した精神を育てることになるのです。

それだけに、家庭でも学校でも、漢字が受け入れやすい右脳が優位な時期をしっかりと見据え、漢字は興味あるもの、楽しいもの、わかりやすいものにとらえられるような漢字学習を充実させてあげてほしいのです。漢字をおいしく食べさせて、漢字に強い子供に育ててあげてほしいというのが、私の願いです。そのために、私自身も今後とも、力を尽くしていきたいと思っています。